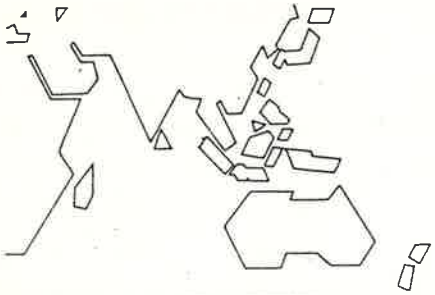
vol. 3　No. 1　Feb. 1989

AMDA NEWSLETTER JAPAN

Association of Medical Doctors for Asia



発行責任者
遠田　耕平（秋田大学第２病理）
tel 0188-33-1166
編集責任者
藤内　修二（大分県丹賀診療所）
tel 0972-34-8334

AMDA／AMSA１０周年記念 シンポジウム組織委員会報告

去る１月21，22日大阪ハローインにて大阪成人病センター田中英夫先生の arrangeで菅波、小林、藤内、川上、小池、国井、安、遠田のAMDA Japanのメンバーと AMSA議長である大阪大学の高島君の参加の元、シンポジウム組織委員会が開催されました。

開催日程や内容の詳細についてもほぼ決定いたしましたので、ご報告を兼ねて紹介いたします。

reconference course

①アジアの伝統医学の現状と将来
（林原フォーラム）
日時：1989年7月30日～8月3日
場所：岡山県林原藤崎研究会議室
目的：中国／中医学，インド／アユルベダ医学，イスラム／ユナニー医学等の各国伝統医学の医療資源としての有用性とその再評価

②日本地域医療研修ツアー
（自治医科大学主催）
日時：1989年8月3,4日
場所：滋賀県朽木村診療所
目的：日本のへき地診療所の見学と地域住民との交流

10周年記念シンポジウム

日時：1989年8月4,5,6日
場所：大阪普門館

8/4（金）Welcome Party
8/5（土）
8:30　開会式
9:00　セッションⅠ「難民問題」
担当：大和市立病院　小林米幸
i）AMDA各国における緊急災害時の体制の確立
ii）日本国内の難民に対する医療問題と難民雇用促進
12:00　昼食
13:00　特別講演Ⅰ
講師：Dr. Krasae
ATC/PHCセンター所長
13:30　セッションⅡ「地域医療」
担当：丹賀診療所　藤内修二
i）特別講義　1
ASEAN Training Center
からの報告
特別講義　2
日本の地域における
実践の報告

ii) パネルディスカッション
"Community Development & Health Promtion"
6ヶ国のパネラーによる発表と討論
17:00　夕食
19:00　AMDA総会
8/6（日）
8:30　特別講演Ⅱ
講師：Dr. Debhanom
Mahidol大学公衆衛生学部長
9:00　セッションⅢ「労働衛生」
担当：産業医学総合研究所
川上　剛
i) 特別講義
アジアにおける労働衛生の現状
Dr.マリーニ
ii) パネルディスカッション
「農村と都市の労働衛生」
6ヶ国のパネラーによる発表と討論
12:00　昼食及び神戸国際会議場へ移動
14:00　**AMDA・AMSA合同会議**
担当：自治医科大学　国井修
大阪大学医学部　高島義裕
i) 第10回AMSA国際会議の報告
ii) AMDAシンポジウムの報告
iii) 討論　「研修システムの確立」
17:00　閉会式

Postconference course
岡山研修プログラム
担当：広田直敷
日時：1989年8月7～11日
内容：姫路インドシナ難民定住促進センターの見学
菅波内科医院や平津学区シルバーコミュニティの見学
水島コンビナートにおける産業／労働衛生の見学
重症心身障害児総合施設の見学
高松農協の訪問
研修終了後、岡山大学学長から研修終了証書の授与を予定

《参加決定国》
タイ、フィリピン、インド、シンガポール
マレーシア、パキスタン、日本

《運営委員》
田中英夫（大阪府立成人病センター疫学部）
安　隆則（国立循環器病センター内科）
《会　計》
岩井くに（岩手県立軽米病院内科）
西成民夫（秋田大学第３内科）
高橋　央（長崎大学医学部）

以前、配布したパンフレットでは神戸国際会議場を使用することになっていましたが、大阪普門館に変更することになりました。普門館は立正校成会の大阪本部ですが、幸いにも私達の主旨に賛同いただき、大会議室（160人収容）及び４日間50人の宿泊を無償で提供していただけることになりました。アジア各国から現在30名余りの参加者が見込まれていますが、彼らと是非ザコ寝をしたいと考えておられる方はお早めに連絡下さい。

３月中旬までに更に詳細な会議のパンフレットを作成し、皆様に送付する予定です。各国へはタイで編集・印刷の始まった英語版のAMDA Newsletterに掲載し、紹介の予定です。

会議は主に英語で進行するため、会議内容の要旨を小冊子として事前に配布する予定です。民間の力による「草の根」会議を是非、実りあるものにするために、皆様のご協力を心からお願い申し上げます。

次回の組織委員会は４月８，９日に大阪で開催の予定です。

海外医療協力を志す人達へ

日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）
伊藤　邦幸

以下に紹介する文章は遠田君が自らの進むべき海外医療協力の道に悩む心の一端を、前号の書籍紹介で登場した「海外医療協力論」の著者、伊藤邦幸先生に綴った手紙に対して、書かれた返信であります。この問題は遠田君一人の問題ではなくAMDAメンバーの共通の問題でもあり、この伊藤先生の書簡をAMDAの全メンバーに紹介したく、伊藤先生の許可を得て、ニュースレターに転載するものであります。

拝啓

お手紙大変懐かしく繰り返し拝見いたしました。

あなたの志に対しては共感と畏敬を、あなたの心境に対しては深い同情を禁じ得ません。あなた達が越えるべき孤独なハードルを力強く、一つ一つクリアして行かれるよう祈ってやみません。

そこで、そのためにいささかなりともお役に立ちたいと願い、今私があなたの立場にあったら何を成すべきかを考えてみましょう。

1．なるべく早く国外で働いてみる機会をこしらえる。2～3年でもよいし、1年でも良い。その経験を基に次のステップを考える。例えばＪＶＣの線、アフリカ南部の難民キャンプの救援などは最も急を要する課題の一つです。

2．一人前の外科医になってから、出かけるのではなく、半人前の医師としてでも充分使っていただける場所を選ぶ。外地で一人前で通用するわけではありません。例えば、外地で働く場合、消化管の悪性腫瘍の手術はできなくてもかまいませんが、外傷、骨折の処置、帝王切開、子宮全摘などは必須でしょう。

3．場合によっては優れた外科医であることよりも平凡なＧＰ（一般医）であることの方が遙かに役に立ちます。

4．ただし、日本に滞在する間に、待ち時間を利用して日本におけるその道の専門医の資格を取ったりすることは有益でしょう。しかし、専門医の資格があれば、或はそれだけの実力があれば、それがそのまま外国で役に立つわけではありません。

5．私は先輩に勧められるままに

a．胸部外科を（結研の外科で）２年間

b．熱帯医学を（カルカッタで）１年間

c．腹部外科を（長浜と浜松で）４年間

d．整形外科を（浜松で）４年間

以上を上述の順序で研修させて頂きました。この中で今度ネパールに帰って役に立つものはＢだけです。元の任期中でしたら、役に立ったであろうものはb＞d＞c＞＞aの順でしょう。つまり私は今になって考えると一番愚かな道を選んだように思います。けれども、必要最低限のことはその場その場で吸収可能なものもあります。

6．最善の準備コースをいうものはおそらくは有り得ないものなのでしょう。誰もが試行錯誤の中で、多大の無駄を甘受しつつ、必要なことを身につけて行くのでしょう。

7．その間、さまざまな技術を親切にも寛大に積極的に教えて下さる先輩に祝福あれ。

8．最適なあるいはそれに近い働き場というものはあるものです。積極的にそれを探し回られるように。本当に客観的状況があなたを必要としている場所。そこで働くためなら生命が７つあるならば７つとも捧げても悔いないと思われる場があるものです。それを見つけられるのが第一です。

9．家族のことを考えると子供達が中学に入るまでが就労可能な期間と見なすのが常識でしょう。するとあなたの場合、余命いくばくもなし。急げや急げ。後は精々おまけと心得るべし。

10．将来海外で働くことを志すものは毎日最低30分を外国語の会話に当てることを義務とすべし。英語、仏語は勿論のこと。スペイン語等も手掛けておくこと。何処で何が起きるか分からない。ＡＭＤＡとしては手分けしてロシア語、中国語のできる人材を養うこと。

11．欧米のいわゆる「途上国」での医療従事者の例をみておりますとかなりに未完成のまま出て来て、現地で様々な技術を習得する人が多いようです。私自身もインドのラクソールの病院での実習が一番有益でした。

12．現地の方達の目の高さから考えて初めてあなた自身の医師としての一歩が始まるとするあなたの志が風化することのないように。

取り急ぎお返事まで

伊藤　邦幸

伊藤先生は東大の哲学科を卒業後、医学部に入られ、医師である夫人と６人の子供と共にネパールのオカルドウンガで日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）派遣の外科医として８年過ごされました。帰国後は聖隷三方原病院におられましたが、今また、末のお子さんが高校へ入るのを機に再び、オカルドウンガへCommunity Health Coordinatorとして、

この１月に赴任されていきました。

この手紙に同封されていたＪＯＣＳへの月例報告の原稿には、伊藤先生の今回のネパール行きの顛末が綴られていました。

ネパールへの再赴任を申し出た伊藤先生の意志は、ここ数年の情勢の変化から容易に受け入れられるものではありませんでした。既にＵＭＮでは医師の供給過剰で悩んでいたのです。結局は、臨床医としての職を断念し、Community Health Coordinatorとして再びネパールでの一歩を踏み出すことになった経緯に伴う伊藤先生の心境は、深い信仰と情熱に支えられ続けたものでした。伊藤先生のご健康とネパールでのご活躍を心からお祈りする次第です。

AMDA International NEWSLETTER 通信

菅波先生が1986年より２年間にわたって、２年間24号の編集・発刊を行ってきた AMDA International NEWSLETTERは昨年の末より、タイの Dr. Nipitが新しい編集責任者となり、vol.3が発刊されました。今まではややもすると編集者で菅波先生に頼りがちでしたが、Dr Nipit はより多くのメンバーの参画を求めています。

以下にDr.Nipitから寄せられた編集要項を紹介します。

NEWSLETTERの使命

1) AMDAの活動の発表の場を提供する
2) AMDAメンバー間のコミュニケーションの場を提供する
3) AMDAメンバーの意見やコメントの交換のためのフォーラムとする

NEWSLETTERの内容

1) 論文
2) 各メンバーの近況
3) 通信
4) AMDAの行事の日程紹介
5) お知らせ

Editorial Staff

Editor:
Nipit Piravej, Thailand

Assistant Editors:
Praphai Piravej, Thailand
Antonio C. Sison, Philippines

Editorial Board:
M.S. Kamath, India
Tsuiyoshi Kawakami, Japan
Evan Murugasu, Singapore
Christmas Tanchatchawan, Thailand

投稿先

Dr. Nipit Piravej
56/13 Soi Kua Witthaya,
Charoen Nakhon Rd, Bangkok
10600, Thailand

編集後記

AMDA International NEWSLETTERが２年間に24号の発刊を見たのに対して、このニュースレターはやっと９号が発刊されたところです。編集責任者としての怠慢が責められてもいた仕方のないところですが、ニュースレター作りに対する皆さんの協力をもっと仰がなければと再認識している次第です。

Dr. Nipitが上に紹介したNEWSLETTERの編集要項の中で、NEWSLETTERの使命とその内容について記していますが、我々のニュースレターも全く同じであります。最近のニュースレターは論文や近況報告といった内容が少なく、10周年記念シンポジウム関係の記事が多くなっているようです。是非、皆さんの近況報告及び最近の活動や研究の成果をご紹介下さい。

先日、小生の診療所に Harvard大学の医学生が３日間ほど実習に来ました。世界一を誇る日本の平均寿命を陰で支えている集団検診と健康教育が日本のへき地でどの様に実践されているかを学ぶというのが彼らの目的でした。費用便益分析により、コストの割に便益が少ないと評価され、既にアメリカでは行われなくなった集団検診が、また、アメリカで見直されているというのも面白い話です。しかし、日本においても現在の保健医療活動に対するきちんとした評価・分析が必要なことは言うまでもありません。海外医療協力についても同様でしょう。単なる活動報告に終るのではなく、きちんとした評価・分析まで行い、後輩達に伝えていきたいものです。